

寒冷地形談話会通信

1996年度第2号 1996年6月3日発行

事務局連絡先：〒101千代田区神田駿河台1-1 明治大学大学院文学研究科
地理学専攻気付 TEL03-3296-4333(呼) 担当：606号室 石井・木村

・5月例会およびシンポジウムの報告

5月18日(土), 14:00から明治大学において酒井氏の発表およびシンポジウムが行われた。参加者: 15名。酒井氏からは、寒冷地形談話会では異例の多田スクールに関しての発表と、奥多摩にみられる滝の密集帯についての報告があった。シンポジウムでは、冒頭に話題提供の岩田氏から、みなさんから寄せられた意見をもとに、寒冷地形談話会の創設期から現在にいたる寒冷地形談話会とそれを取りまく周辺の状況の鋭い分析と、今後とるべき活動方針のいくつかの例の提示がなされた。その後の議論も各参加者から様々な意見がなされ大いに盛り上がった。(シンポジウムの内容の詳細は近いうちに報告します)

・6月例会のお知らせ

寒冷地形談話会 6月例会

日時: 1996年6月22日(土)15時～

場所: 明治大学大学院棟5階509号室

題目1: 三枝 茂氏(総研大・院)

第37次南極地域観測隊報告

「ひがし南極, エンダー, リーセルランセン山の岩石氷河」

題目2: 柳田 誠氏(アイ・エヌ・エー)

「山はいつ削られるのか?」

・夏の学校(サマースクール)のお知らせ

本年度の夏の学校は、高橋伸幸氏(北海学園大)の案内により大雪山で行うことに決定しました。日程は7月26日～29日、宿泊はテント泊を予定しています。詳しい予定は近日中にお知らせします。

また、9月中～下旬頃に五百沢智也氏の案内によるカクネ里の巡検を予定しております。詳細は後日お知らせします。

・会費納入のお願い

今年度の会費1500円の納入を、同封の振込用紙にてよろしくお願いいたします。口座番号は下記の通りです。

口座番号

寒冷地形談話会 00100-9-171342

・名簿作成について

ただいま、本年度の会員名簿を作成しています。前号の通信に同封した返信用ハガキをまだお送りいただけていない方は、会員の確認もかねていますので、住所・所属等をご記入の上お早めにご返送願います。ハガキがお手元に見えない場合は、会費納入の際に振込用紙の通信欄でお知らせ下さい。

寒冷地形談話会5月例会発表要旨

「昭和期における多田スクールの形成とその地理学史的意義」

酒井 啓（慶応高校・非）

本研究では、現代日本地形学の一主流を形成した多田文男研究グループについて、その形成史と地理学史的意義を明らかにすることを試みた。

多田は、1920年に東京帝国大学理学部地理学科に入学し、山崎直方、辻村太郎の指導のもとで地理学を専攻した。多田の研究歴は、Ⅰ期からⅤ期に区分できる。Ⅰ期は1912年から1926年までで、旧ドイツ領南洋諸島の海食段丘などを研究している。Ⅱ期は1927年から1930年までの東京帝国大学付属地震研究所時代で、主に断層地形を研究している。Ⅲ期は1934年から1943年までの海外学術探検時代で、主に砂丘を研究している。Ⅳ期は1944年から1972年までの資源科学研究所時代で、主に平野地形を研究している。Ⅴ期は1973年から1978年までの最晩年時代で、主に気候地形を研究している。

多田を中心とする研究グループが成立したのは、Ⅱ期に分けられる。まず、前期研究グループは、文部省直轄資源科学研究所（1941年12月8日設立）の地理学班員（小笠原義勝、川田三郎）と保柳睦美から構成されている。資源科学研究所は、日本史上はじめての博物学的自然史博物館であり、いずれ国や軍部による軍事利用に組み入れられる予定だった。そこで多田らは、巨大な国家予算を背景に、内蒙古や日本国内の砂丘形成論を展開した。それは、年代論こそ入っていないものの、砂丘形成史が気候変化と対応することを述べている。次に、後期研究グループは、多田スクールと呼ばれ、敗戦後に財団法人として再発足した資源科学研究所の地下水班・土地災害研究班などの班員（中野尊正、大矢雅彦、三井嘉都夫、市瀬由自など）から構成されている。慢性的資金不足のなかで、多田グループは官公庁から資金を調達して資源開発・災害復興事業に関わる応用地形学的研究を行った。多田スクールの構成員は、多田が東京大学・法政大学から資源科学研究所に引っぱり込んだ研究者達である。彼らは、多田の地理学観の影響下にある弟子であり、多田に心服していた。

多田は、優れた教育者で弟子に対して博愛的であり、研究テーマは自由に選ばせた。また、学風は地形発達史が特色である。これは、辻村太郎が弟子に権威主義的で、自ら観察し筆をとって地形論を展開し、地形発達史的研究をしなかったのと対照的である。これに対し、三野与吉は多数の弟子を育てた点で、多田と共通するが、優れた地理教育思想家であった上に、地形営力論を展開した点で異なっている。

「南関東の山地上流域における滝の密集帯の分布とその成因」

酒井 啓（慶応高校・非）

本研究では、関東山地多摩川流域において山地河川源頭やや下流にみられる滝の密集帯の存在を明らかにし、その成因を考察し、次のような知見を得た。

①滝は、多摩川支流の小川谷や梅沢谷の各支流において、複数の密集帯が存在している。ただし、滝の成因は個別的には従来の成因論で説明できる。

②滝の密集帯は、そのほとんどが河床縦断面形の遷急点の下流側に分布している。滝の密集帯の分布は、大局的地質構造、地質条件とは基本的には関係がない。ただし、チャート地域では滝が多く形成されやすい。

③河床縦断面形の遷急点には、本流から支流へと波及する侵食の上限を示しているものがある。河床縦断面形の遷急点の分布は、大局的地質構造、地質条件とは基本的には関係がない。ただし、チャート地域では、チャートが堅硬であるために遷急線が形成される。

④多摩川本流域周辺においては、侵食の上限を示している河床縦断面形の遷急点は、二種類存在し、各支流の最下流部と中流部に分布している。

まず、前者の遷急点は、その高度が完新世段丘の天ヶ瀬段丘や千ヶ瀬段丘とほぼ同じであり、支流が段丘を横断して下刻している部分に遷急点が存在していることもある。従って、遷急点は、後氷期に多摩川本流が急激に下刻したことにより形成されたものと考えられる。

一方、後者の遷急点は、遷急線と支流谷底との交差点であり、その遷急線は、枝支流における遷急点を通っている。また、これら枝支流の遷急点は、支流河床からの相対高度が同じ程度である。さらに、遷急線は支流下流部の青柳段丘崖に連続している。この青柳段丘の基底は、高木（1990）により7～8万年前に遡ると推定されている。従って、遷急点は最終間氷期に多摩川本流が急激に下刻したことにより形成されたものと考えられる。

⑤多摩川本流域周辺においては、滝の密集帯は最終間氷期に形成された遷急点の下流側に分布している。また、滝は後氷期に形成された遷急点の下流側にも分布している。

⑥遷急点の下流側に分布している滝は、遷急点の持つ位置エネルギーに降水増加が加わったことにより、下流側に強い侵食力が働いて形成されたものと考えられる。また、滝の後退により遷急点も後退していくものと考えられる。

本研究により、山地の侵食現象に関して全く新しい知見が得られた。すなわち、山地には守屋（1972）や羽田野（1986）が提唱している崩壊・土石流発生を通じた侵食現象以外に、滝の密集帯の形成・後退を通じた侵食現象が存在している。前者は谷頭部における侵食現象であるが、後者は谷頭から数百m～数km下流側における侵食現象である。

今後は、早急に小川谷流域の滝の密集帯の形成期を明らかにする必要がある。そのためには、小川谷流域と多摩川本流域との間に分布している谷について、多くの河床縦断面図を作成し、空中写真判読により遷急線分布図を作成すれば、問題解決できると考えている。

以上の問題解決の後には、研究対象を日本全国の山地に広げることにより、新しい地形観が確立するものと考えている。

寒冷地形談話会北海道支部での現状から思うこと

1996年4月26日

寒冷地形談話会北海道支部
渡辺 悌二

『寒冷地形談話会通信／1996.4.22.』によれば、5月18日に「シンポジウム：いま、寒冷地形談話会が目指すものは」が開かれるとのことですので、北海道支部での活動の現状をお知らせさせていただき、いま感じていることを述べさせていただきたいと思います。

本部で問題となっている「例会の沈滞傾向」は北海道支部においても認められます。これは、ちょうど大学が週休2日制になったころから始まったように思われます。週休2日制になってからは、土曜日に例会を開催しても北大を中心とした一部の限られた人しか参加しなくなりました。そこで平日の夕方に開催を変更しましたが、やはり北大を中心とした一部の同じメンバーだけが参加するようになりました。この原因の一部は、事務局側のピーアール不足等にあると思われるのですが、寒冷地形談話会への大学院生（札幌の場合は学部学生の参加がきわめて限られています）の熱意がうすらいだことも大きな要因のひとつであると感じています。私がスイスに滞在していた10カ月間は、ほとんど例会が開かれなかったようですし、その後も年末に一度開催されただけです。

寒冷地形談話会を学生の皆さんの情熱なしに継続させていくことはできません。一般の学会等の集まりとは異なり、事務局運営を含めて大学院生が会をリードしていかなければならないのです。しかし現実には、北海道支部では、年寄り連中の指導が悪いのか大学院生はきわめて受け身です。われわれ年寄り連中が反省すべき点は多々あっても、やはり大学院生のがんばりがこの会を継続させてゆく原動力となるべきではないでしょうか。

北海道支部では、例会の数を大きく減少させ、年に2～3回でいどにしようという意見があります。そのかわり毎回、半日から1日かけて多くの人に発表を行ってもらいたいと考えております。その他に外国人や道外からの研究者が来札された折には、従来のように1～2名の発表会をいれる可能性があります。

このような形態をとることによって、より多くの人が参加できるようにしたいのです。特定の人が参加するだけでは、北大のゼミをやっているようで、これではいけないと強く思います。また、例会の回数を少なくすることによって、事務局側の負担を軽減させたいと思います。このような形態で運営すれば、通信文の発送に必要な会費を大いに削減させることができますので、少なくとも今年は会費をタダにしてみようと考えています。したがって、e-mailやファックス等を利用できる会員にはこれらの手段で例会のお知らせをしたいと思います。

例会の開催回数を少なくさせて一回あたりの発表者数を多くさせると、発表そのものが一般の学会のように形式的なものになる危険性があると思います。その点については、寒冷地形談話会が長い間もち続けてきた、どんなことでもざっくばらんにディスカッションできる空気をのがさないよう努めねばなりません。いずれにしても、寒冷地形談話会は、いま、大学院生の皆さんからもっとたくさんのエネルギーをいただく時期に来ていると思います。